エッセイ特集２　ヴィクトリア朝研究の現在

ヴィクトリア朝美術研究の新風

渡部　名祐子

近年、イギリス美術、とりわけヴィクトリア朝美術研究の勢いが目覚ましい。芸術家や特定の美術動向の詳細な個別研究はもとより、ある美術作品が今日にいたるまでいかなる影響力を持ち続けて来たかに対する関心が、最近はことに高まってきているように思われる。本稿では、最近刊行された下記の四書を紹介しつつ「ヴィクトリア朝美術研究の新風」をお伝えしたい。*The Reception of Titian in Britain: From Reynolds to Ruskin*（ed. by Peter Humfrey, 2013）, *Botticelli Reimagined*（ed. by Mark Evans and Stefan Weppelmann, 2016）, *Frank Dicksee: 1853-1928; His Art and Life*（Simon Toll, 2016）, *Lawrence Alma-Tadema: At Home in Antiquity*（ed. by Elizabeth Prettejohn and Peter Trippi, 2016）.

まず、*The Reception of Titian in Britain: From Reynolds to Ruskin* は、18世紀後半から20世紀初頭に至るまでのイギリスにおけるティツィアーノ受容を、美術様式論のみに限定されない多様な視点から明らかにしようとするアンソロジー形式の論集である。イギリスとティツィアーノとの関わりは深く、このヴェネツィア派の巨匠を学んだヴァン・ダイクが17世紀はじめにイギリスに渡って以来、近代イギリスの美術様式形成の一要因となったとしてその影響力の大きさが指摘されてきた。更に、1860年代以降ティツィアーノを高く評価したラスキンと不可分の関係にあったラファエル前派を論じる上ではほぼ必ずその影響関係がトピックとして取り上げられてきた。美術様式の形成のみならず、近代イギリスの「趣味の歴史」を解き明かすうえでも重要な位置を占めるティツィアーノだが、これまで、個別の事例か

らの具体的な分析にはいまひとつ踏み込んで来なかったきらいがある。そうした中で、2011年5月にセント・アンドリュース大学で行われた学会発表をもとに、熟練の研究者から気鋭の若手までを執筆陣に迎えて編纂された本書は、イギリスのロイヤル・アカデミー初代会長レノルズ、さきに挙げたラスキンをはじめ彼らと関わりの深い芸術家たち、個人コレクター、そして美術制度に公的に携わった人々に至るまでの広範囲に焦点を当てた意欲的な一冊である。

本書を構成する16の論文は、いずれも異なる著者の手による異なった話題を扱ったものでありながらも全体として散漫な印象はなく、すべての論文を読み終えた時、相互補完的にティツィアーノ受容をひとつ定義する結果となった印象を受けるのが面白い。

18世紀末までティツィアーノの絵画はイギリスでは版画による複製を通じて知られるのみであったが、そうした状況に決定的な変化をもたらしたのが、Peter HumfreyやRosie Diasらが指摘するように、ナポレオン戦争を逃れて大陸から渡ってきたオルレアン公のコレクションであった。Humfreyは本書の序文で、このコレクションがイギリスの芸術家、一般の芸術愛好家たちに与えた衝撃がいかほどであったかを文筆家William Hazlittの言葉を引用して印象づけているが、Hazlittがティツィアーノ作品との出会いを通じて見出した美的価値については、Tom Nicholsの論文に詳しく見ることができる。Philippa Simpsonはティツィアーノ作品が広く公の目に触れることになった「新たな時代」以後の美的体験のあり方の変化を論じている。ティツィアーノが広くイギリスに波及した経緯については、Jonathan Yarkerが複製画とその需要層の趣味の観点から、Linda BoreanとGodfrey Evansが個人コレクターとコレクションの関係から、Catherine Whistler、Susanna Avery-Quashが美術館所蔵品となった事実から、更にJeremy Howardが特定の作品がイギリスからアメリカに渡った事例から論じているが、ここで今ひとつ見逃せないのは、やはり芸術家の間に見られる、ティツィアーノをめぐっての美の基準の変遷であろう。Stephen Lloydはコレクター、鑑定人、アート・アドヴァイザーとしての当時の芸術家の役割に着目し、ティツィアーノ芸術を理解し研究を進めたのは彼らであると論の最後で述べている。Martin Postleは「当代のティ

ツィアーノ」と称されるまでになったレノルズが、ティツィアーノを批判しつつも熱心に研究し、自らの作風に反映させた経緯などを『美術講話』や弟子による書簡の読解から明らかにし、さきのYarkerはティツィアーノがヴェネツィア派の色彩とローマ派の構成とを見事に融合させた巨匠として、アカデミーで長く称賛されたと指摘した。Diasはコンスタブルがティツィアーノを「歴史と風景を融合させた」巨匠と捉えたこと、フュースリがこの巨匠を色彩の魔術師という従来の位置づけから「調和」の体現者に昇華させた例を挙げ、これらの特徴こそが当時のアカデミーの理想、市場の需要双方と折り合いをつけようとする芸術家たちに訴えるものであったと述べている。コンスタブルについては、Anne Lylesが筆致の特徴や作品の細部からティツィアーノとの比較を行っている。更にJason Rosenfeldは19世紀以降の例としてラファエル前派の一員ミレイを取り上げ、主にその画業後期の奔放な筆致と色彩の効果から影響関係の分析を試みている。また、William McKeownは当初はティツィアーノに対し否定的だったラスキンが一転して高い評価を与えるに至った背景を、『近代画家論』の読解とラスキンの伝記的事実を通じて明らかにし、Caroline Campbellは19-20世紀の文学作品におけるティツィアーノ像を追った。

ティツィアーノ受容の観点から、18世紀から20世紀にかけての様々なトピックを扱った本書は、近代イギリス美術界の動向や趣味・趣向、美的基準の大枠を把握することに成功したと言える。その一方で、Humfreyが冒頭で断りを述べている通り、ティツィアーノ受容に関するすべての事象が取り上げられたわけではなく、またRosenfeldの言葉を借りれば、「ティツィアーノ的と言った時、当時の芸術家たちがどのようなものを考えていたか」に関する問は、未だ明確になってはいない。充実した読後感を味わいながらも、なお思考を巡らさずにはいられないのも、そのためだろうか。ティツィアーノ受容についての更なる解釈の可能性への期待と同時に、近代における過去の巨匠の受容をめぐる探究心を掻き立てられる一冊である。

続いて紹介する*Botticelli Reimagined*は、2016年3月から7月までロンドンのヴィクトリア＆アルバート美術館で開催されていた同名の展覧会のカタログとして出版されたものである。全360ページ、出展作品をはじめと

した200点を超えるカラー図版に加え、専門家による論文22本を掲載するハードカバーの重厚な豪華本で、独立した一冊の資料としても大きな価値がある。

ボッティチェリといえば、15世紀イタリア・ルネサンスの巨匠としてのみならず西洋美術を代表する存在として名高く、国際的にも世代を超えて愛される芸術家のひとりである。今や彼の作品は美術の枠を越え、とりわけ《プリマヴェッラ》と《ヴィーナスの誕生》は商業デザインの一部として、あるいは公共室内装飾の一部として取り入れられるなどして流布しており、日常生活の場面でもよく見かけるほどに馴染み深くなって久しい。その一方で、この芸術家が没後長きに渡って忘れ去られ、その存在と作品の価値が「再発見」されたのはようやく19世紀も半ば頃になってのことであり、ボッティチェリが今日「巨匠」としての評価と位置づけを与えられるに至ったのには19世紀の文化人の活躍、とりわけイギリスの文筆家、芸術家の尽力によるところが大きいという事実は、一般にはあまり知られていないように思われる。本書*Botticelli Reimagined*は、まずボッティチェリの手になる作品を、19世紀イギリスにおけるボッティチェリ再評価と20世紀欧米諸国での研究の動向との関わりから分析する。のみならず、「再び創造されたボッティチェリ」というそのタイトルが端的に表すように、19世紀以降の芸術家たちがどのようにボッティチェリを見ていたか――21世紀の今日に至るまで、ボッティチェリにインスパイアされたアーティストがその影響のもとにどのような新たな表現を生み出していったかを、いわばボッティチェリ受容の歴史というコンテクストで概観しようとする初めての試みである。何故、ボッティチェリの芸術は国際的に評価され、時代を超えて魅力的であり続け、更にはポップ・アイコンとなり得たのか。展覧会および本書はこの問のもとに、近代から現在までのボッティチェリ受容の歴史を、絵画、彫刻、写真、映像作品、ファッション、デザインの分野から概観しようとする大事業となった。

本書は、監修者Mark EvansとStefan Weppelmannを含めた4名による序文、ヴァザーリによるボッティチェリ論の英語訳文ののち、大きく6つのパートで構成される。

前半の3パートはテーマごとの論文アンソロジーで、“Botticelli in His

Time”と題された第1パートは生前のボッティチェリの活動や、19世紀に注目を集めることになる《スメラルダ・バンディネッリとされる女性の肖像》、『神曲』の挿絵などの作品に関する論文4本からなり、ボッティチェリの画業を概観できると同時に、のちの「再発見」時代を考察するための伏線となっている。続く第2パート“The Rediscovery of Botticelli in the Nineteenth Century”では、ボッティチェリ再評価の動向を主にイギリスに焦点を当てた8本の論文で分析する。ボッティチェリの「再発見」と美術館コレクション形成との関係、そして再評価の立役者ともなったロセッティやバーン＝ジョーンズ、ビアズリーといったラファエル前派系の芸術家への影響、更にはイギリスと並行しての大陸での受容の歴史など、この時代の動きがいかに次の20世紀から現代への布石となったかを明らかにしている。第3パート“The Twentieth and Twenty-first Centuries: Botticelli as Brand”では、20世紀に発展したボッティチェリ研究、ファッションに採り入れられたボッティチェリ、大戦後に映像作品として応用されたボッティチェリ、1940年代以降のアメリカで新たな芸術作品の一部として採り入れられ、様々に変容していくボッティチェリのヴィーナスなどを、8本の論文から考察する。研究史を取り扱った論文にはアビ・ヴァールブルク、ヘルベルト・ホーンなど美術史学そのものの発達に大きく貢献した人々が登場し、彼らが19世紀の唯美主義的思考＝詩的感性に影響を受けつつも、ボッティチェリの作品を「歴史的に」考察・分析することを目指した経緯が明らかにされている。また、20世紀半ば以降にボッティチェリがアメリカに公的に浸透する契機となった美術史家バーナード・ベレンソンの思想と活動、その弟子で日本とボッティチェリとをつないだ矢代幸雄の活動を取り上げた渡辺俊夫氏の論考は、この芸術家の人気の国際性を考えるうえでもとりわけ興味深い。

後半の3つのパートは展覧会の出展作品の詳細な解説にあてられる。まず第4パートで20世紀から21世紀現在に至るまでに制作された作品を、第5パートで「再発見」時代＝19世紀の芸術家の手になる作品を、最後の第6パートでボッティチェリ自身の作品を、時代を遡るかたちで紹介する。これまで並べて検討されることのなかった、ボッティチェリの手になる作品群とそれらにインスパイアされた近・現代の作品群を同時に、大量に見

ることができるのは、本書の売りのひとつである。

主題の差異はあれ、19世紀は新たな表現の範をボッティチェリに求めた。20〜21世紀では、それまで絵画、彫刻、写真に限定されていたメディアが映像、CG、インスタレーション、パフォーマンスなどに多様化したほか、作品はボッティチェリのモチーフを借りて社会的メッセージを強く打ち出すもの、時に攻撃的ですらあるシニカルさやセクシャリティをテーマとするものから、オリジナルのコンテクストからは完全に切り離され、全くの別物として自立しているものまで、多岐に渡る。「何故、ボッティチェリなのか」という問いのもとに集められた一連の作品とその作者をめぐる膨大な量の情報は、ひとつの答えを出すというより、新たな問いを呼ぶ結果となったように思われる。——何故、アーティストたちは自らを仮託する相手にボッティチェリを選び続けるのか。「*Botticelli Reimagined*が偏見に挑み、過去の芸術が現代にとっての活力であることを証明する事業となることを願う」という本書の前書きに立ち返った時、この問いへの興味は尽きない。

特定の作家の個別研究の分野でも、新たな領域を果敢に開拓していこうとする傾向が著しい。

*Frank Dicksee: 1853-1928; His Art and Life*は、そのタイトルのとおり、ヴィクトリア朝からエドワード朝を中心に活躍したイギリス人芸術家、フランク・ディクシーの画業と生涯を概観しようとする試みである。ディクシーは現在、若くしてロイヤル・アカデミーに入学して研鑽を積み、ラファエル前派の影響を受けた文学的主題を、アカデミー仕込みの卓越した画力で手掛けた画家として知られている。しかし実のところ、ディクシーについては筆者の管見の限りではこれまで際立って論じられたことがなく、19世紀から20世紀のイギリス美術を扱った先行研究でも極めて断片的に取り上げられるのみで、その生涯と画業の全貌は明らかになってはいなかった。

そのような中にあって、本書は大判のハードカバーという豪華な装丁で全256ページ、未出版のものを含むおよそ300点ものディクシー作品を掲載する、管見の限りこの芸術家に関する初の個別研究書である。著者の

Simon Tollはウォリック大学で美術史を学んだのち数々の画商で研鑽を積み、現在はサザビーズでヴィクトリア朝美術部門のチーフを務める実力者で、2003年にはそれまで謎多き画家としてあまり語られることのなかったハーバート・ドレイパーについての著書（*Herbert Draper: 1863-1920; A Life Study*, ACC Art Books Ltd., 2003）を出版するなど、新たな研究領域の開拓に実績がある。本書は、そのTollが15年にもおよぶ調査を通じてディクシーの手になるほぼすべての作品を確認、所蔵先を特定し、それらをこの芸術家の生涯とともに紹介するはじめての試みであると同時に、初のカタログ・レゾネとしての役割も兼ね備えた、文字通りの大著である。

本書に掲載されたディクシーの作品を概観した時、印象的なのは鮮やかながらも柔らかな色彩と、時に例外はあれ、全体的な雰囲気の穏やかさである。ディクシーは生涯で歴史画、風景画、肖像画をはじめ、ラファエル前派の影響を受けたとされる文学的主題までを幅広く手掛けたが、そのいずれも筆致、色彩ともに明瞭でありながらも、淡い巧みな光の表現によって、その作品世界には心地よい静けさが満ちている。

そのようなディクシーの作品とその生涯を追うにあたり、本書はFrederick C. Rossによる序文と全17の章で構成され、ディクシーの誕生から没するまでが年代順に語られる。ディクシー一族の系譜について語った序章ののち、第1章では本名フランシス・バーナード・ディクシーとして1853年に誕生して以降の少年時代について、ジョージ・ヘンズローが主催する学校に通いながら画家である父トーマスのもとで修業していた1870年まで記されている。第2章から第4章までは1870年にロイヤル・アカデミー美術学校の学生となってからの修業時代、76年の正式なアカデミーデビュー、77年に中世風の舞台に音楽と詩的情緒をテーマとして描いた《ハーモニー》で一躍有名作家となったこと、そしてこの時期には『コーンヒル』誌などに挿絵を提供する仕事も手掛けていたこと、81年にはアカデミーの準会員になったことなど、その早熟ぶりが1883年までの業績を中心に語られる。第5章は先行研究でも取り上げられた、文学や騎士道を題材とした作品とその同時代での評価を中心に、第6章はその名声がレイトンと並び称されるまでに至ったことなどが、1890年までを区切りとして明らかにされる。第7章では91年以降のアカデミーでの活躍と正会員への昇進、

様々な画題に挑戦して大きな反響を呼んだことが、第8章ではその反響や批判を受けて精力的に活動する過程が、第9章では1900年の《二つの王冠》がチャントリー基金買い上げになるなど、画家としての成功が続いた過程を追っている。第10章では20世紀に入って以降、時代の変わり目とともに世間の趣向が変化し、物語性や情緒をテーマとするディクシーの人気にも陰りが見え始めたこと、第11章ではその中にあって自らの理想を追求し続けながら、実利的な肖像画も手掛け始めたことが語られる。第12章から14章では、作風が第一次大戦の影響を受けたことをはじめ、大戦前後の活動を肖像画制作中心に概観、第15章では1924年にアカデミーの会長に就任し、高齢にあってその激務をこなしながらも制作意欲に衰えはなかったことなどが語られ、最後の第16章では1928年に没するまでが記される。

ひとりの芸術家の画業をその生涯とともに追う試みでは、作品の主題と芸術家の境遇とを重ね合わせ、その視点から芸術家のすべてを語ろうとする傾向に陥ることがある。本書においては、ディクシー本人と彼の周囲の人々の言葉、同時代に書かれた批評など、大量の一次資料に基づいて客観的に分析している姿勢が好ましい。F. C. Rossが序文の最後で引用した評のとおり、ディクシーがロイヤル・アカデミーに活動の拠点を置き、詩的情緒と夢幻的な場面の表現、詩や物語に基づくロマンティックな主題の表現に優れ、モダン・アートには無関心であったとすれば、モダニズムの隆盛とともに忘れられてしまったのも歴史的な必然であっただろう。彼が強い影響を受けたラファエル前派をはじめ、19-20世紀初頭のイギリス美術の再評価が進んで久しい今日、本書を契機としてディクシー研究が進展することに大いに期待したい。

最後に紹介する*Lawrence Alma-Tadema: At Home in Antiquity*は、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて幅広く活躍した芸術家、ローレンス・アルマ＝タデマの画業を論じた一冊である。本書は、オランダのフリース美術館にはじまるアルマ＝タデマの国際巡回展[1]の関連書籍として刊行された、全240ページ、300点を超える図版に加え、展覧会監修者のひとりでもあるElizabeth Prettejohnをはじめとした総勢17名の研究者による論考を収

録した豪華本で、アルマ＝タデマの画業を伝記的に追いながらも、年代ごとに設定されたテーマに沿って分析することを試みた、この芸術家についての最新の研究書である。

1836年にオランダのフリースラント地方に生まれ、アントウェルペンの美術アカデミーで画業の研鑽を積んだアルマ＝タデマは、1870年から永住することになるロンドンで名をあげ、一躍人気作家となった。アルマ＝タデマはその画業の初期から古代世界に強い関心を持っており、中世の逸話やエジプト、ギリシャ、ローマの日常生活を題材とした絵画を手掛け、その画題の親しみやすさもあって広く人気を博してきた。古代の遺物研究や実地検分を通じた正確さ、精密さを特徴とする彼の作品は、とりわけ当時のイギリス美術の潮流であった唯美主義と古代趣味の文脈でこれまでも少なからず取り上げられ、レイトンやムーアなどの大家とともに論じられてきた。本書はそうした先行研究の伝統に則りつつも、アルマ＝タデマ作品の大きな特色である「空間」について、彼を取り巻く様々な要素からの考察を主眼としている。

第1章では1836年に誕生してからの少年時代と、アントウェルペンでHenri Leysに師事した修業時代が取り上げられる。過去の世界をいかに「リアル」に表現するかを学んだことや、のちのアルマ＝タデマの最大の特徴である細密な描写はこの修業時代に由来することなどが語られる。それを受けた第2章では、1870年にロンドンに移住してから画商Ernest Gambartの助力を得、人気作家として多忙を極めていた85年までに焦点をあてる。リージェンツ・パークに構えた邸宅ダウンゼント・ハウス、のちに移り住んだグローヴ・エンド通り17番の「カーサ・タデマ」が芸術家仲間をはじめとした人々の一大社交場になったことや、異国の製品に満ち溢れたその室内の様子がアルマ＝タデマの二番目の妻で画家でもあったローラ、次女アンナの作品とともに提示される。更に、屋外での制作が流行していた当時にあってアルマ＝タデマが室内の制作に専念していた事実にも注目し、アルマ＝タデマと彼の家族が自らデザイン・装飾を手掛けた自宅のインテリアそのものを考察対象とすることで、制作環境が作品と相互関係にあったことが指摘されている。第3章はアルマ＝タデマの名声がイギリス国内外で確かなものとなった1886年から1912年に没するまでに焦点をあて、

同時代の人々との交流や、後世への影響関係を論じている。先行研究でもたびたび比較されてきたレイトンとの関係性については、両者が古代の事物から得たインスピレーションの違いなどから考察されているのをはじめ、長く古代と中世世界を主題としてきたアルマ＝タデマの作品と、若き日のクリムトの絵画との影響関係が取り上げられている。第4章では、衣装デザインなどの舞台装置の仕事も手掛けた多彩ぶりや、アルマ＝タデマの没後、20世紀以降はその絵画世界が古代を舞台とした映像作品のイメージ・ソースとして重宝された過程が、1913年の映画*Quo Vadis?*から2014年の*Exodus: Gods and Kings*に至るまでの作品群によって例示される。単に舞台装置づくりにとどまらず、映画の鑑賞者をよりその場面に惹きこむためにアルマ＝タデマの絵画の画面構成の妙が採用されているという指摘は、視覚芸術に対してアルマ＝タデマが成し遂げたことの革新性、美術史的な重要性を改めて強調している。

フリース美術館館長Kris Callensが冒頭で述べているとおり、本書および展覧会からなる一連のプロジェクトは、アルマ＝タデマの画業を概観する試みであった1996-97年の大回顧展を引き継ぎながら、その絵画世界の「空間」の特徴を捉える視点から美術史的な意義を探ろうとする試みとなった。とりわけ、これまでのアルマ＝タデマ研究でも話題にはのぼりながらも具体的な考察に至ることのなかった、アルマ＝タデマの没後にその絵画が映像作品の主要なインスピレーション源として、また彼の邸宅のインテリアそのものも主要な視覚資料となって現在にまで生きているという指摘は新鮮であった。その意味でも、アルマ＝タデマ特有の、古代世界の精密でありながらも鑑賞者に想像の余地を残す巧みな描写は、若き日にLeysのもとで学んでいた修業時代に原点があるとする本書第1章での指摘は、重要な意味をもつと思われる。さきの*Botticelli Reimagined*でも見たように、過去の芸術作品の現代での受容、その二次的利用が興味深い事象として積極的に考察対象とされる今、アルマ＝タデマ作品の新たな見方――これまでの様式分析や古代趣味研究とは異なる視点からのアルマ＝タデマ研究の可能性を期待させる、意欲的な一冊として捉えたい。

注

1　フリース美術館（レーワルデン、オランダ、会期：2016年10月1日～2017年2月7日）、ベルヴェデーレ美術館（ウィーン、オーストリア、会期：2017年2月24日～6月18日）、レイトン・ハウス美術館（ロンドン、イギリス、会期：2017年7月7日～10月29日）

――国立新美術館研究補佐員